

31. 比叡山出土の 石鏃をめぐって

1

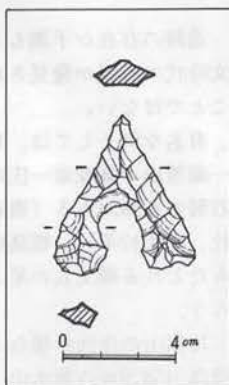
比叡山延暦寺にある阿弥陀堂は、法華総持院の故地と伝承されている場所を造成して建立されたもので、東塔の諸堂の中では最も高い位置を占めている。この地に伝教大師出家得度1200年を記念して、東塔の再建が予定されたため、それに先立って昭和53年2月から3月にかけて、滋賀県教育委員会では文化庁の指導を受けて、法華総持院跡の発掘調査を行った。その際に、阿弥陀堂の南側にある平坦地に設けたトレンチから、延暦寺創建以前の思いがけない遺物が出土した。

地表下約1.2mの土中にキラリと光ったその遺物は、赤茶色のチャートを加工して作った1点の石鏃と、おそらく石鏃などの石器を製作する時にできたと思われる2点のチャートの石屑であった。石鏃は図に示したように、細部にわたっていねいな加工が施され、V字形のシャープな形態をしており、縄文時代の——しかも、かなり早い時期のものと考えて誤りはなからう。もっとも比叡山での石鏃の出土は、今回が最初ではな

く、村山修一氏の「比叡山の歴史」(『比叡山、その自然と人文』、昭和36年、京都新聞社)によれば、石鏃の時期は不明であるが、大正時代にも山上から発見されたことがあるという。このような、最澄による比叡山開発以前の遺物を、いったいどのように考えれば良いのだろうか。

かつて景山春樹氏は、その著『比叡山』(角川書店、昭和50年)の中で、「最澄以前の比叡山」の姿を次のように描いている。

「……山をとりまくふもとの地域には古くから住民はいたし、山城側の山麓にあたる北白川の台地には、有名な北白川の石器時代遺跡もあり、その住居址からは、狩猟に用いた石鏃や石槍などが出土している。このように山をとりまく各地域に住んでいた人々は、おそらく原始的な比叡の林叢にわけ入って、食用の小動物などをとったり、燃料や用材を採集していたにちが



法華総持院跡出土の石鏃



比叡山遠景(矢印 出土地点)

いない。

景山氏のイメージの世界が現実となった遺物の出土地点は、現在の地表面で標高 717m。そこから比叡山の主峰大比叡岳は、もう手がとどきそうな近い距離に見えている。

この石鏃をテーマに、私なりの「縄文の世界」を描いてみよう。

2

遺跡の存在が予測もされないような山の中から、縄文時代の石鏃が発見された例は、何も比叡山に限ったことではない。

有名な例としては、日本アルプスの八ヶ岳の南峰——編笠山で藤森栄一氏によって採集された1個の黒曜石製の石鏃がある（藤森栄一『かもしかみち』、学生社、昭和42年）。標高は約2,400m。これが出土遺物からたどれる縄文人の足どりの、本邦最高所の記録であろう。

比叡山の今回の場合とよく似た例は、神戸市にある標高 458.9mの菊水山（城ヶ越山）の山頂でもあった。この山は、大楠公——楠木正成を祀る湊川神社の背後に美しい山容を見せていることから、市民にも親しまれている。六甲山系の山としてはそう高い山ではないが、山頂からの眺望はすばらしい。だが、山の正面から山頂への道は、思った以上に険しい山である。ところが近年、菊水山の山頂に無線中継所が建設されることになり、それがきっかけで縄文時代のもので推定される石鏃や石器が何点か採集されている。

ここで気がついたことは、神戸の市街地から眺める菊水山も、大津の市街地や対岸から見る大比叡岳も、共に特徴ある山容を示している点があげられよう。美しい山の姿が、現代の登山家達の心を誘惑するように遠く縄文時代の人々もまた、単に獲物を追い求めて山中へわけ入ったのではなく、時には美しい山の高さへと引きつけられる何かが、心の中に働いていたのではなかっただろうか。

遠い昔の、私達の祖先が抱いた夜に対する恐怖が、夜に口笛を吹くと蛇が来るとか、新しい下駄をおろしてはいけないなど、つい近年まで私達の身のまわりにタブーとして残っていた。同じように、「そこに山があるから登るのだ。」という現代の登山者の熱き血のたぎりは、山頂近くに石鏃を残したはるかな祖先の冒険の火に起因するものかもしれない。こうした想像の世界が許されるなら、平地から見て特徴ある山容の山々には、きっと縄文時代の「くらいまあ」達の何らかの登頂の証拠が見出されるはずである。

話が横道へそれはじめたので、もとへもどそう。

3

さて比叡山の場合、縄文時代の文化層は、平安時代



にこの地に法華総持院を建立する際破壊されており、遺物は二次的な堆積によるものであった。しかし、石鏃と石屑がいっしょに発見されたことは、縄文時代の比叡山の状況を推定するうえで、大きな意味をもっている。それは、石鏃だけの単独出土なら、弓から放たれた矢が偶然その場所で発見されたという可能性が多分にある。その点、石屑という石器製作の過程で生じる遺物を伴っているということは、たとえ一時的、短時間にせよ、その場所がキャンプ地として利用されていたことが十分にうかがえる。ただ、出土地点付近は比較的に晴しが良いとはいっても、比叡山特有の夏は湿度が高く、冬は凍てつくような寒さのため、いかに現代人と生活環境の異なる縄文人とはいっても、定住するとなれば決して生活に適した場所とはいえないであろう。そういった悪条件の場所へ——おそらく季節は考えて登ったものと思われるが、なぜキャンプの必要があったのだろうか。それについての回答は、私達の調査中の体験が全てを物語るであろう。

それは2月の雪の降り積った朝のことであった。阿彌陀堂の南の平坦地に南北にかけたトレンチの南端をかすめて、イノシシが走り抜けた跡を雪の上に見た。イノシシは一頭ではなく、数頭が群をなしていたようで、ドライブウェイの通っている谷から山腹の斜面を登り、阿彌陀堂の南側を通り抜け、納骨堂のある山の中から西塔の方角に消えていた。雪に残された足あとには、猪突猛進の言葉どおり、まっすぐに伸びていた。しかし、そうした光景も数日続くと、もうあたりまえのことになってしまい、誰の注意もひかなくなってしまう。

そういえば、昭和52年11月に同じ比叡山の横川にある藍山の山中で、中世の墓地を発掘していた時に、丘陵の裾で遺構と誤認してイノシシが泥あびをする時に掘るノタを発掘したことがあった。ノタと気がついてから付近をよく注意してみると、隣の小支丘でもそれらしい窪みが見つかった。そして、それらをたがいに結んで行くと、現在の林道がつけられる以前に、回峰行者などが通っていた小径の跡とよく合致する部分もあった。

4

私はまったくの偶然かもしれないが、現在のイノシシの道のそばで石鏃の出土したことに強い興味を感じるのである。有史以前の比叡山を考える時、人の立入りをこぼむかのようなうっそうたる森林を抜けて山へ入る方法としては、私達が雪の中に見たイノシシの道のような、獣の道を見つけてそれをたどって行くしかなかったであろう。それは、シカやイノシシなどの獲物を追うことから学んだ知恵であり、まさに一石二鳥といえよう。しかし、こうした道をたどって登った比叡の山は、豊富な鳥や獣、山の中の泉などの好条件を備えながらも、長期的な人の滞在をこぼんでいる。そ

れは先にも見た、多湿寒冷といった気象条件によるものであろう。それゆえに生活の中における比叡山は、季節的に獲物を追って行く一つの移動路でしかなかったかもしれない。そして本来の生活基盤は、山麓の丘陵地帯なり、湖に近い低地に営まれていたのであろう。

それとは別に、大正時代に頂上から発見された石鏃と今回の石鏃をあわせて考える時、先に見た生活のサイクルとは別に、山頂をきわめようとした縄文時代の個人の胸の炎を見る思いがするのである。もし今後資料の増加があるとしても、はたしてこの問題に決定的な終止符がうてるであろうか。

東塔法華総持院跡より出土した3点の石鏃や石屑から、以上のようにいくつかの推察がなされるのである。しかし、この石鏃が私に与えた一番の感銘は、神秘的な威圧感すらある独特の山容をしたあの比叡山の、しかもおそらく道とは言いがたい道を通して山頂を目指した、縄文時代の「くらいまあ」——あるいは「狩人」であったかもしれない——の冒険心につきよう。

その意味では、この石鏃ほど、遠い祖先の情熱のたぎりが、ひしひしと現代に伝わってくる遺物は他に例がないであろう。(兼康保明)

32. 石山寺蔵重要文化財 銅鐸の出土地について

石山寺所蔵の重要文化財銅鐸が江戸時代の文化3年に石山寺辺の一老坊より出土したことは、この鐸を蔵した箱の蓋裏に尊賢僧正が明記しておられるところである。この鐸を学界に紹介された若林勝邦氏がこの箱書きをあわせ紹介され、梅原末治博士もその著「銅鐸の研究」に若林氏の録されたところを転載されている。ただし、この時は、梅原博士は実際にその箱書きを見ておられなかったが、後に筆者と同道でこの箱書きを実見されている。その後、水野正好氏が同寺の関係者の蔵せられた「古銅奇物記」なる文書を発見され、滋賀県文化財専門委員の中村林一氏がこれを解読され、この鐸の発見から石山寺所蔵となるまでの経緯が明らかになった。これによると、それ以前に筆者が発見者の子孫に当たる堀井清吉氏から聞いていた発見の経緯と大同小異で、この文書が正しく当時の状態を伝えているものと思われる。しかもこれが先の箱書きの文面とも齟齬しないものであることから、この鐸の出土地は一老坊に間違いのないものと思われる。ここは石山伽藍山の南の谷で、寺辺から千町の方へ向かう道の西方の田である。梶川正三氏が作製された滋賀県滋賀郡石山村大字寺辺の地図の「巡礼道ヨリ西醍醐道野々宮中野別所花田ノ一部」という部分のうち、銅鐸出土に関



×印 台帳記載位置
○印 正しい位置

係する部分を、かつて筆者が寺辺の奥村氏より写させてもらったが、その図の「257の1」という田が銅鐸が出土した田である。前述の堀井清吉氏の述べられた位置もこのあたりであり、ほぼ間違いのないと思われる。

ところがどのような経緯があったのか不明であるが、

滋賀県教育委員会発行の滋賀県遺跡目録（昭和40年度）に、一老坊遺跡の位置が地図上には全然違った所に印されているのである。筆者がこのことを知ったのは最近のことで、大津市教育委員会の西川技師からその正確な位置を問われてはじめてその誤りを知ったような次第である。筆者にとってはこの位置はあまりにも自明のことであったので、地図によってその位置をたしかめたことが一度もなかったのである。地図に印された位置は瀬田川に面した伽藍山の東縁になっている。従って銅鐸の出土地を考える時、実際の出土地とは大

分異なった印象をうけることとなる。この地図の位置だと、石山寺縁起にある銅鐸出土の伝承に非常に近くのである。実際はこの伝承とは関係なく、谷奥に近い溪流のほとりの斜面で、開墾により偶然発見された場所としていかにも相応しい位置であり、銅鐸出土のあり方を示す一つの模式的な場所と言える。僅かな位置の相違のようであるが、銅鐸出土の位置を考えるうえではこの両者は非常に異なった位置を示していると言わねばならない。従って今後の立論に誤りなきを期するためここに一言する次第である。（西田 弘）

33. 小型円板の新資料

— 大津市南滋賀廃寺、高島郡 高島町中ノ坊遺跡、同町構口遺跡 —

奉養銭、冥銭と考えられる歴史時代の小型円板が、『滋賀文化財だより』No.1以降新たに3例が知られたので追加資料として紹介しておきたい。

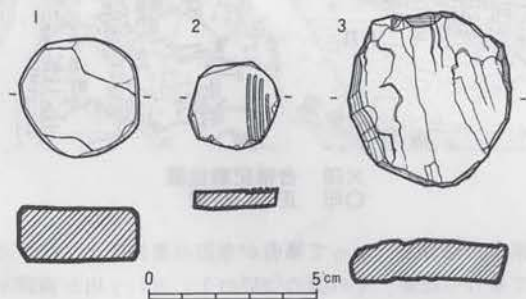
1. 南滋賀廃寺

昭和47年秋に発掘調査を実施した、大津市南滋賀町の南滋賀廃寺北東隅から、瓦片を加工した小型円板が1点出土している。

遺物は、平瓦の破片を加工して円形に整えたもので、直径3.6cm、厚さ1.6cmである。色調は、表・裏面が淡黒色、側面（瓦の断面）は青灰色をしている。整形は、平瓦の一部を打割った後、側面を磨いて丸く仕上げている。

本例は、大きさは多少異なるが、『滋賀文化財だより』No.1で資料紹介を行った守山市服部遺跡例と、厚さや色調、整形などが類似する。おそらく服部遺跡例と同様、近世の遺物であろうか。また、断定は困難であるが、これ以外にも形状から見て小型円板ではないかと考えられる平瓦の破片が2点出土している。

なおこの調査については、『昭和51年度滋賀県文化財調査年報』に収録されているので参照されたい。



小型円板実測図 1. 南滋賀廃寺（大津市）
2. 中ノ坊遺跡（高島町）
3. 構口遺跡（高島町）

2. 中の坊遺跡

昭和52年秋に発掘調査を実施した高島郡高島町の中ノ坊遺跡第98トレンチより、陶器片を再加工した小型円板が1例出土している。

遺物は、信楽焼の襦鉢の口縁部に近い部分の破片を円形に整形したもので、直径2.7cm、厚さ0.55cmである。色調は、淡赤褐色で、胎土には少量ながら微砂が混入している。焼成は硬。整形は、陶器片を打割った後、側面を磨いて丸く仕上げている。陶器の時期と、他の包含層出土遺物から見て、室町時代以降の遺物ではないかと推定される。

3. 構口遺跡

昭和53年5月～6月にかけて、高島郡高島町では場整備に伴い発掘調査を実施した結果、中ノ坊遺跡の東約400mで新たに発見された中世の遺跡である。この遺跡より出土した小型円板は1点ではあるが、石製である点が注目される。ただし本例も、これまでの県内での出土例同様、その用途を推測させるような出土状況ではなかった。しかし包含層の堆積状況から見て、遺物の整理が進めば、小型円板の時期決定もかなり期待できよう。

遺物は、扁平な石の周囲を打割って円形に整形したもので、直径5.0cm、厚さ1.2cmである。色調は、灰色をした硬質の石である。

この種の小型円板の中で石製のものは珍しく、特に自然石を加工した例は、これまで奈良市元興寺極楽坊包蔵坑出土資料中に1点知るのみであった。また本例とはやや様相が異なるが、福岡県筑紫郡太宰府町御笠川南条坊遺跡出土資料中に、滑石のものが見られるが、その中には石鍋の破片を再加工したものも含まれている。

以上3例の追加によって、奉養銭、冥銭と考えられる小型円板が、県下にもかなり広く分布するのではないかという見とおしを得た。また、県外では一般的な土師器片を再加工したものについても、近い将来、新たに出土するか再発見される可能性が多分にあることを指摘しておこう。（兼康保明・篠原友子）